『三高の見果てぬ夢
――中等・高等教育成立過程と折田彦市――』

田中智子

厳　平著

本書は、第三高等学校（三高）前身校をめぐる一八七〇年代から九〇年代にかけての諸事象について、多くを語った本である。一八八〇年以降長く校長職にあった折田彦市の前歴を扱った後、学校の組織改編に沿った章立てを行い、その中で折田や三高前身校に関わる多様な見解が提示されていく。

序章「近代日本教育史における中等・高等教育」で、研究の課題・視点・方法と本書の内容・構成が述べられる。第一章「折田彦市の米国経歴とその意義」では、校長折田の言動を理解する手がかりを得るべく、一八七〇年代における彼の米国留学体験が検討される。第二章「模範中学校としての大阪中学校」は、折田校長の役割に注目しながら、大阪中学校の模範中学校としての教育機能を明らかにせんとする。第三章「第二の「大学」としての大学分校」は、大学分校の考案段階から実現後に至るまでの高等教育機関改革草案や規則を分析し、折田と文部省の思惑のズレを考察する。第四章「モデルとしての第三高等中学校」では、尋常中学との接続問題などを通し、第三高等中学校の実態やそのあり方に関する見解の相克が描かれる。以上をふまえ、結章「折田彦市から見た近代日本の中等・高等教育の模索」では、序章で課題とした一八八〇～九〇年代における中等・高等教育の成立過程について新たな仮説的解答を試み、課題と展望を示すとされる。

以下本稿では、概ね章の順序に沿いつつ、横断的に二三の主題を析出する。各主題に密接に関連する先行研究を指摘し、それに照らし合わせながら論評する。

一　折田彦市の留学とその教育経験

第一章で想起される先行研究は、板倉創造『一枚の肖像画』（三高同窓会　一九九三）である。同書は学術専門書の体裁をとっていないが、岩倉具視やフルベッキを介した留学の経緯、岩倉使節団との出会い、森有礼・新島襄の存在、コーウィン牧師やマコッシュ総長の影響、学業と学友（高良二・スチュワートら）、スポーツ体験、受洗など、本書で順次取り上げられる主題を指摘している。板倉著書をくぐり抜けた立場からすると、本章には既視感を覚えるとともに以下の疑問をもった。

まず、在米中の日本人との交流に関して、「岩倉使節団と森と新島」という視点は妥当だろうか。著者は、使節団は折田の米国経歴に大きな転換をもたらしたと位置づけ、岩倉兄弟が父具視の来米をきっかけに離米したことで、折田が自分の留学生活について再考する機会を得たとする。岩倉兄弟の付添人という立場による行動の制約から脱し、留学生としての自覚と自由が与えられ、プリンストン入学に至ったというストーリーが示される。しかし、折田が渡米直後から居所や学修環境を兄弟と異にしていたことに鑑みても、随行者としての拘束性は不明である。彼は大学から米

国留学を命じられた一学徒でもあり、兄弟の離米後も官費留学を続けている。著者自身、「岩倉具視と会ったのもただ一日だけ」で「〔兄弟に関する報告の〕他に使節団との関連も確認されない」と指摘しているのだから、使節団訪米の影響を「状況が一変した」とまで過大視すべきではない。使節団の教育調査に随行するに至った新島襄と同列に捉えてはならないだろう。

また、在米中の新島と折田の交際の有無は不明であり、大学入学に際し森弁務使が折田の「保証人」となったことをもって、「公務」を超えた親密な交際があったとみなす点は、他の在米留学生のケースと比較しても、説得力を欠く。確かに森や新島は折田同様、後に教育界で名を成す人物であるが、それは結果論であろう。三者の比較で始まる結章も含め、板倉著書における「森有礼、新島襄、折田彦市　三人の侍」という、一種耳目を引きやすい見方が踏襲されている。そのこと自体が悪いわけではないが、板倉に倣った岩倉（兄弟・使節団）重視の視点ともあいまって、留学時における他の重要な人間関係が不問にされているのではなかろうか。

本書には登場しないが、在米中の折田に関わった人物として見逃せないのは、同郷薩摩の出身でもある吉田清成公使ではないかと考える。よく知られるように、一八七三年十二月、留学生整理のために海外日本人留学生の一斉帰国命令が出された。本書には、この留学制度史上の重大画期をからめた考察がみられない。召還対象となった折田は、私費留学（出資者は特定できないが岩倉家の可能性もあろう）の願出を改めて聞き届けられ、留学を続けている。つまり、彼は約六年の留学生活において、後半を私費留学生として過ごした。そして折田の世話役は、一八七五年六月に赴任した初代海外留学生監督（官費生が主対象）の文部官僚目賀田種太郎ではなく、外務官僚吉田公使だったといえる。

吉田のプリンストン視察計画（授業参観やマコッシュとの面会）の他、折田の吉田妻子への気配り、帰国後の地所購入周旋など、それこそ「公務」を超えた親密な交際が認められるが、何よりも重要なのは以下の二点である。一つは、吉田が留学生折田のいわば金庫番を務め、投資利殖の請負役、帰国費用調達に関する文部省との折衝役にあたっていたこと。二つ目に、吉田は折田の希望を容れ、フィラデルフィア博覧会事務に従事できるよう、大久保利通総裁（内務卿）や西郷従道副総裁に依頼したことである（以上、『吉田清成関係文書』一・四〔思文閣出版　一九九三・二〇〇七〕所収書簡より）。私費留学生折田にとって、博覧会御用掛（審査官通弁専務）の任務は、百五十ドルの手当支給という経済的意味も大きかったであろうが、教育事務取調のため博覧会に派遣された田中不二麿文部大輔らに随行したことが重要ではないか。『米国百年期博覧会教育報告』や『米国学校法』としてまとめられた彼らの視察成果に、折田の働きが反映された可能性はないのだろうか。折田研究にとって問われるべきは、岩倉使節団との関係というより、フィラデルフィア博覧会派遣団との関係である。病身の東京開成学校長畠山義成を介護しつつ帰朝した直後の文部省督学局入りが、博覧会での仕事ぶりの結果であることは想像に難くない。彼の文部官僚としての人生は、在米時に吉田によって開かれ、田中らとの邂逅のなかで定められたといえよう。

折田を通して一八七〇年代から九〇年代の中等・高等教育政策

を考えることが本書全体の目的であるならば、彼の文部官僚としての経歴や人脈などを確定することは必須であろうが、その端緒、すなわち留学を契機とした文部省入省にいたる経緯の分析が欠落している。基礎史料としての公的履歴書の収集を欠いたためではないだろうか。同時に、折田分析にあたって当面有効なのは、彼を教育思想家ではなく教育行政家として捉える視線を堅持することだと評者は考えるが、アメリカ留学についても、教育行政面での影響を析出できないだろうか。例えば第二章では、折田が大学への直接入学を目指す独自の中学校改革案を打ち出したことが重要な論点に挙げられるが、これは留学体験とは結び付けられていない。また第三章に関連し、「彼による「低度大学」のこの地方分散構想は、まさに一八六〇年代後半以降アメリカ高等教育にも見られた動向と通底している」（結章）との読み飛ばせないくだりもあるのだが、これ以上の言及や具体的論証を欠くことは残念である。

副次的問題であるが、「教育思想家」折田の分析に関しても検討しておこう。林竹二の森有礼研究が引き合いに出されることにもうかがわれるように、著者の視角は、この点において、アメリカ留学の影響を強調するものである。第二章では、教則の分析などを通じ、大阪中学校が府県中学校の指導的な役割を果たしていたとまとめられるが、そのなかで特記されるのが体育や寄宿舎入舎自由選択制の導入であり、これは留学時に出会ったプリンストン総長マコッシュの影響によるものとみなされている。

当該期アメリカでの大学自由化改革の急先鋒、ハーバードのエリオットに対するマコッシュの反論は、すでに潮木守一『アメリカの大学』（講談社　一九八二）で分析されている。著者は同じ史料提示を通じ、マコッシュの理念を「秩序ある自由」と位置付け、それを折田が学んだと結論付ける。しかし潮木が示すように、マコッシュがここで言う「秩序」は学科目の必修という次元の問題であり、折田とは直接つながらない。証明の難しい「影響」の問題において（特に折田自身、アメリカ留学を語ったことがない）、それがあったとする視角自体は不当なものではないが、マコッシュからの受洗が彼の教育理念の受容を意味するという解釈（結章）、体操教育と寄宿舎制度の二点をもってマコッシュの「再建六ヶ条」と折田の「将来ノ要務」が「酷似している」とする評価などは行き過ぎだろう。マコッシュ個人の影響力はそこまで強調されるべきものではないとの印象をもつ。

本書では、体操への銃器導入や寄宿舎規則の制定（第四章第二節）をもってしてもなお、フランス留学経験のある第一高等中学校長木下広次、あるいは森を引き合いに、折田は「自由」と評価され続ける。では比較問題としてではなく、折田が「古武士的の人物」と評され、志気の軟弱に流れるのを戒めた（大浦八郎編『三高八十年回顧』関書院　一九五〇）という側面はどう理解されるか。あるいは、教育勅語を奉戴し鍛練による気風養成を呼びかける演説（筧田知義『旧制高校制度の成立』〔ミネルヴァ書房　一九七五〕も多義的に言及）はどう解釈できるか。薩摩藩士時代に受けた教育も見逃せないし、留学にしても、ジェントルマン養成機能という旧来型大学の性格も残したプリンストンにおいて、古典語反復の日課やピューリタン的風土など、いわば「秩序」こそが折田に適合したという見方もありうる。

ある意味で結論の見えている「アメリカ留学→自由」という図式に還元するのではなく、多様かつ重層的な教育経験の影響を指摘していくことで、人物像にふくらみが出るのではないだろうか。

なお、第二章での分析を踏まえて著者は、「従来、大阪中学校の位置づけについては、東京大学予備門とおなじく大学予備教育機関としてしか捉えられてこなかった。しかし「……折田の構想・実践は」府県立中学校のモデル的役割を果たしていた」（結章）と述べる。だが、『「中学校教則大綱」の基礎的研究』（梓出版社　二〇〇四）にまとめられる四方一瀾の業績、あるいは『京都大学百年史』総説編「創立前史」（一九九八　海原徹執筆）が、本書第二章と酷似する「官立模範学校としての大阪中学校」を章題とした叙述であったこと一つをとってみても、著者の研究史整理には疑問を抱く。

二　森文政と高等中学校制度

第三章は、文部省・府県中学校・東京大学がそれぞれの思惑をもつなかで、文部省と対立する「中学規則案」さらには「関西大学校案」を折田大阪中学校長が打ち出していたこと、大阪中学校を改組し現実にできたのは「大学分校」であったが、これは森が「五大学校」として構想した「地方大学」のモデルに近かったことが強調される章である。

ここでは、順に湯川嘉津美「一八八四年の学制改革案に関する考察」（『上智大学教育学論集』四〇号　二〇〇六）、中野実「大学分校と大学構想」（同『近代日本大学制度の成立』所収　吉川弘文館　二〇〇四）、および拙稿「第三高等中学校設置問題再考」（『京都大学大学文書館研究紀要』第三号　二〇〇五）という近年の成果との関係が問われる。中野の研究は、第三高等中学校の前身である大学分校を取り上げるにあたり、東京大学予備門の動向、文部省の五大学校構想を合わせて検討したもので、本章の構成と近似している。著者は、中野が注目するにとどまった府県連合設立高等学校案については、中野没後の湯川の研究に依拠し、基本的に中野と湯川の枠組みを組み合わせて論を進めている。序章において本書は森文政研究の一環だと宣言されるが、森文政再検討の旗印もかつて中野によって掲げられたものである。

ここではまず、森文政誕生直後の「五大学校構想」（第三章第三節）に関する記述を検討してみよう。「五大学校構想」は、諸学校令発布前夜における文部省の構想として中野が問題化した事象であり、かつて拙稿でも検討したが、著者は関西大学校案とならぶ高等教育構想だとして、かなり大きな扱いを与えている。

実証上、そもそも「五大学校構想」は新聞雑誌史料にしか登場しないので足元が危ういと感じるが、その上でいくつか疑問を呈したい。まず、構想の具体的内容を示す史料の一つに挙げられる『大阪日日新聞』なる新聞は、当時存在しない。拙稿が指摘した同日の『大阪日報』記事のことだろうか。新聞史料の利用は著者の手法とするところではないようだが、同じ誤認が第四章にもみられ、新聞に関する基本知識や検索方法が疑問視される。次に、「経費を文部省と設置区域たる府県の両方が負担する点が「「五大学校構想」と高等中学校制度では」共通している」（第四章第一節(1)）という指摘であるが、「五大学校構想」が府県からも経費を支弁させる発想をもったことを証明する史料は提示されて

おらず、どのような根拠にもとづく議論なのか不明である。高等中学校制度の根幹の一つは、国だけではなく府県から運営経費を支弁させようと企図したことだと評者は考えてきたが、先立つ「五大学校構想」の中にそれが萌芽していたことを示す決定的史料には、いまだお目にかかったことはない。三つめに、『時事新報』の記事一つを論拠に、「五大学校構想」が「財政上の理由で放棄された」と断定しているが、どうだろうか。財政難は以前から省内でも自明の前提であり、それを理由に放棄されるような構想であるならば、そもそも思いつきレベルの一案に過ぎなかったということだろう。

分析に先立っては、中野が「五大学校構想」に言及した理由とその妥当性を吟味する必要がある。中野の念頭には、一八八五年十二月の内閣制度発足・森の文相就任を画期と捉え、その後数ヶ月間を、四月の諸学校令に結実する森文政始動期として重視する時期区分があったのだろう。そして、当該期の政策動向を語る史料が不足するなか、新聞雑誌検索という方法により「五大学校構想」を析出したのである。また、中野の探求主題は「帝国大学体制」であり、その一環として帝国大学令の成立史を考えていた。であるから、「大学校」構想としての「五大学校」案に着目したのだろう。

しかし、中野論文と拙稿が指摘した「五大学校構想」期の新聞雑誌史料だけではなく、より長いスパンで各種新聞を探索すると、一八八五年八月の教育令改正以降、様々な改革構想が紙上を賑わしていることがわかる。そして一八八四年秋の府県連合設立高等学校案から一八八六年四月の高等中学校制度発足にいたる経緯を、「大学」という文言にとらわれず、中学校や専門学校を含めた学校体系再編の模索過程として把握すると、「六大医学校」「連合府県学校条例（全国八ヶ所ほどに設置。中学校より高尚な学科）」「職工学校（大阪他六ヶ所）」など、興味深い報道を検討課題として取り出すことができる。本書が高等中学校制度成立史の探究を目的に掲げ、ましてや次章で高等中学校が専門分科を設置できる制度であることを重要と位置付けるなら、学科内容すら不明で構想としての確実性もあいまいな「五大学校構想」のみを中野の意図以上に過大評価し、一つの歴史的段階として定立してしまうのは強引かつアンバランスであり、事態の適切な把握とは言い難い。

さらに第一章同様、文部官僚折田の経歴分析が課題視されないことに首を傾げる。森文政発足に伴い、折田は文部権大書記官・学務局次長に任ぜられ、大阪の学校長の座は一八八七年四月まで中島永元に委ねられる。本書が全体として強調するのは、折田（学校）側と文部省側との「意見対立」「ズレ」「摩擦」「違い」、要するに文部省に対して折田がいかに自立していたかということだと読める。では、そのような折田が「森文相の改革断行」により、大阪の学校長を降りて本省勤務となったことはどう解釈されるのか。この人事問題への何らかの見解表明が要るのではなかろうか。というのも、大学予備門長杉浦重剛に関しては言及があり、森有礼との意見対立、森の文政人事プランからの杉浦はずしが指摘されているのである。杉浦が対立したと回顧する「当局者」がどうして森と直ちに推測され、他の文部官僚の可能性が簡単に捨象されるのかわからないが、この見解を援用すれば、折田と「対

立」した、あるいは本省に呼び寄せた人物も森だということになるのだろうか。

著者の森文政期像は、ほぼ森と折田から組み立てられる。だが、高等中学校制度成立前史に関しては、大木喬任文部卿や学務局の辻新次・浜尾新などの働きを見逃すことができない。森文相就任以降の政策も、以前との連続と断絶を総合的に検討することが必要だと評者は考える。折田の去就は、おそらく浜尾の人事と密接に関連する。浜尾は一八八五年十二月から一八八七年八月まで欧州へ教育視察に出かけて不在である。折田はほぼこの間、事実上学務局トップの位置にありはしたが、そのポストは浜尾の待遇と連動し、学務局次長→学務局長→学務局長代理と激しく上下している。折田は浜尾の代役ということなのか、それとも密かな浜尾はずしなのか、可能性は色々と想定できる。表向き、折田が森・辻・浜尾に次ぐ文部省のナンバー4と映るこの間の人事や人間関係を、高等中学校制度成立前後の連続した問題として究明しなくてはならない。森文政における文部行政家折田の評価は、この点を欠いては成り立たないのではないか。折田および第三高等中学校の独自性も、文部省という組織内での彼の発言権・裁量権を考慮しなくては論じられない。

第四章第一節「第三高等中学校の発足過程」は、大筋で拙論の焼き直しである。文部省から特定府県への設置費用十万円負担を条件とした高等中学校設置の内示、折田や辻ら文部高官の視察とその京都府における事実経過、あるいは高等中学校設置区域と文部行政区分である地方部との関係、設置区域第三・第四区の区分変更のいきさつ、高等「中学校」であるがゆえに府県に財政負担を求める正当性が得られたこと（結章）など、以前より評者は指摘してきた。使用される京阪地域の新聞記事や京都府行政文書なども既に利用した史料である。だが叙述については、「森文相」と「文部省」、あるいは「京都」（北垣府知事か府当局か府会か）など、主語の使い分けに神経が遣われてもよいのではとの印象を受ける。

第二節で再び体操教育や寄宿舎制度の動向を叙述したのに続いて、著者の視線は一八九〇年代にまで向けられる。高等中学校と尋常中学校との接続問題を扱った第三節は、中野の意をうけた西山伸の「第三高等中学校における『無試験制度』」（『地方教育史研究』第二三号　二〇〇二）を発展させ、後神俊文「第三高等中学校と設置区域内尋常中学校との連絡」（同『岡山中学事物起源覚書』一九八八）が言及した岡山の事例を加えた記述となっている。高等中学校の「設置区域」制度とは、各府県生徒の進学先を強制するものではなかったものの、大学進学希望者についてのみ無試験入学制度を導入し、区域内の生徒を優先し、私学出身者排除の機能も果たしていたとの結論が導き出される。上級学校と下級学校の接続問題は教育史学界の伝統的課題でもあり、本節については初出時の批評（『日本教育史研究』第二三号　二〇〇四）も存在する。具体的内容についてはそちらに委ね、最後に示される著者の高等中学校観に言及して閉じよう。

要するに著者が主張するのは、高等中学校制度とは低度地方大学構想の一変形・一階梯であり、三高の展開こそがその構想を体現していたということだと思う。だが、高等中学校は単一の狙いをもって立案された制度ではなく、府県の動態を反映しながら形

作られ、また森の文部行政家としての個性も影響し、柔軟性をもって運用されたものと評者は捉える。一八八六年発足時と森の死を挟んだ一八九〇年代以降、理念と機能、森の意図と現実の政策展開とは異なる。であるから、「（専門教育機能を併設する）三高の方が「中学校令」が構想した学校像に近かった」という結論や「モデルとしての第三高等中学校」という章題には賛同できない。あえて名づけるならば、「一実験場としての第三高等中学校」などとする方がふさわしいと考える。

三　「三高」への視線——全体を通じて

関連諸研究を参照しつつ、著者独自のエッセンスは何かと頭をめぐらせてきたが、たどり着いたところは意外とシンプルなスタンス——三高前身校を、折田彦市の「執拗に追究しつづけた夢」である低度の地方大学化を目指した教育機関として描き、その存在意義を強調する——であった（本書には「きわめて重要」の語が頻出する）。折々に表出する当該校の大学化構想は特に新発見ではないが、それを折田という個人に凝縮させ、一貫した計画と捉える点において本書は際立つ。結果として、明確な理念や主張の持主としての折田像が浮き出てくる。一方で「無為の人・折田先生」（何もしない、であるからこそ結果的に「自由」）という解釈は退き、他の校員の影も薄くなる。度重なる改組が示すように文部政策に翻弄された学校であった、というイメージも後退する。

文中には説明されない本書のタイトルについて考えてみよう。著者はしばしばこの学校を「三高」と表記する。評者は「三高」を、少なくとも第三高等中学校以前の時期に使用することは避けてきた。なぜなら、高等教育の拡充が図られナンバースクールの存在が定着するのは二十世紀以降であり、それに伴い、他との対抗意識の下に校風論が云々され出し、特有の属性を想起させる愛称「三高」も定着したものと捉えるからである。その属性は歴史的に生成したものであり、例えば「三高＝自由」も、実態というより言説の創出という次元で分析する方が当面有効と考えている。対するに著者は、「折田がアメリカで経験した「自由」観」「折田は東京（一高）に対して強いライバル意識を持っていた」「（東京側との）トラブル」「文部省との争い」等々、いわゆる三高アイデンティティを一八七〇年代にまで遡って求め、「一高よりも三高の方が」といった比較方法により解釈していく。本書には演繹的発想が強くみられるのだ。第三高等中学校にも「三高」の呼称を付し、大阪中学校や大学分校の分析を含む本書全体のタイトルとしても「三高」を掲げたのは、ある意味で著者らしい。

続くタイトル「見果てぬ夢」の意は定かではないが、「夢」とは折田の「夢」すなわち三高の「低度大学」化を、「見果てぬ」とは結章に書き連ねられる「可能性」の話を指すのだろう。折田の構想は第三高等学校を母体とした京都帝国大学創設として実を結んだかもしれず、それは各府県に広がったかもしれず、戦後の一都道府県一国立大学という教育改革が早く現実となったかもしれないという予測のことのようだ。京都帝大創設計画案における「折田案」など、根拠が明示されない記述が続くが、史的妥当性を云々すべき問題ではなかろう。むしろ歴史観という次元において、上昇・拡大・先行的可能性（＝「夢」）への著者の共感がうかがわれるようで興味を覚えた。ちなみに評者は、第三高等学校

が京都帝大などに変身せず、各地には「高等学校」が増設され、「旧制高校」という類まれなるモラトリアム文化が花開き、三高がその主要な一翼であり続けたという「現実」にこそ価値を見出し、その半世紀の歴史をこそ「（過ぎ去りし）夢」と表現したい方である。

最後に、本書は著者の内に想起されたことすべてが盛り込まれたような能弁で野心的な著作であるが、評者の力をもってしては、課題と結論の必然性や整合性、多用される「仮説」という言葉の意図が折々に理解しづらかった。折田の留学経験、その教育思想、中学校令（高等中学校制度）の成立過程、上級学校と下級学校の接続関係など、本来別次元の検討課題が、学校改組に即した編年体をとることで、外枠としては一本の筋にまとめられている。しかし、「低度地方大学化を志向する三高（折田）」という内的な筋にすべてを収斂させるには無理もあるのではないか。特に寄宿舎や体操といった（「自由」とされる）教育の質に関わる問題は、ここにどう関わるのだろうか。

一方、実証面における本書の着眼点・収集史料・解釈は諸先行研究に多く依拠しているはずで、独創性の所在を見極めることがなかなか難しかった。同時に、学術書としてのマナーを欠くのではないかと折々に感じられたのも事実である。評者の感性に従うと、先行研究を乗り越える立論ではない場合、その研究に負う旨を明記し簡潔に叙述すべきだと思うのだが、著者によるアイデアあるいは史料発掘・解釈に読める部分、先行研究の仕事の敷衍や微分に留まる箇所が散見した（本稿脱稿後、「先行研究と新たな知見との間」との副題の下にこの点を詳細に検討した荒井明夫の本書書評〔『一八八〇年代教育史研究会ニューズレター』第二五・二六号、二〇〇九年〕に接した）。本書が諸研究を網羅的に縫合しその上に組み立てようとした、いわば年史（通史・概説）的性格をもつ書物なのだと位置付けるならば、納得可能なことではある。本書のもととなった学位論文に比すれば注記等に配慮を加えられたようでもあり、著者としては妥当な線なのだろう。だが、先行研究と似て非なる点や、その問題点をはからずも継承している点は、指摘しても許されることであり生産性もあるはずだ。そう思いながら本小文をしたためた。

本書は、「学位論文が百本も書ける」三高史料群を利用した一本目にあたるという。三高前身校と折田彦市に関わる思考過程を、一冊の書物という形で余すところなく披露し、その存在価値を高からしめんとした著者のバイタリティには、感服するしかない。神陵史資料研究会が編じた記念碑的業績『史料・神陵史』（一九九四）、および『京都大学百年史』総説編（一九九八）に続き、現時点での様々な研究成果を盛り込んだ三高前身校史として、今後参照されていくのではなかろうか。

（A五判　三五二頁　二〇〇八年五月　思文閣出版　税別七五〇〇円）

（財）三高自昭会　三高記念室）